

シリーズ「国土教育」 国土への働きかけの経緯と成果…歴史教科書の取り上げ方

中学校の社会科(歴史的分野)教科書



新しい中学歴史教科書の特徴

- いずれの教科書も、**歴史上の著名な人物や文化遺産等を主人公とする「政治史・人物史」「事件・出来事史」となっているため、国土形成の歴史やインフラの役割や効果、インフラ整備に携わってきた人々の苦勞などを体系的に学習することは難しい。**
- 現代(戦後)のインフラ整備に関する記述が極めて少ない
- テーマ(発展)学習やコラムには、興味深い学習内容もある。

- ▼信玄堤(帝国書院、清水書院、育鵬社)
- ▼宝暦治水にみる水とのたたか(帝国書院)
- ▼日本の衛生行政の始まりー長与専斎(日本文教出版)
- ▼お雇い外国人(育鵬社)
- ▼八田與一(育鵬社、自由社)など

国土に働きかける努力を先人たちが行ってきたおかげで、私たちは国土から生活の安全性や利便性を得ることができている。森林、田畑、河川、水道、道路、鉄道など、国土への働きかけの歴史とその恩恵のもとに、私たちは暮らしている。しかし、こうした当たり前の事実を、普段、私たちが意識することはない。「当たり前」であるが故に、口に出して人に説明することもない。一方で、インフラ整備(公共事業)の必要性とその効果を十分に理解していない人も少なくないように思う。国土への働きかけの経緯と成果を、わが国の歴史教科書ではどのように取り扱っているのだろうか。

現行の中学校の社会科(歴史的分野)教科書は、国土への働きかけの歴史について、次の事項を取り上げている。

原始から古代の時代区分では、他の時代区分に比べ、また当該時代区分の全体記述量に比べて、国土への働きかけに関する記述量は多い。

植物栽培の開始【縄文時代】
灌漑水路の整備と水田稲作の拡大【弥生時代】
古墳建設と大和朝廷の国力【古墳時代】
渡来人が伝えた土木

中近世では、平清盛による大輪田泊整備と日宋貿易【平安時代末期】
農業の発達(二毛作・牛馬)

耕・用水技術)、交通の発達(馬借・車借・問丸)【以上鎌倉・室町時代】
戦国大名による国造り【戦国・安土桃山時代】
河川改修・新田開発と耕地面積の倍増、五街道の整備、内航航路(西廻り航路・東廻り航路・河川水運)の開設【以上江戸時代】

戦国大名による国造りでは、信玄堤(武田信玄により築かれた霞堤(かすみてい))と呼ばれる河川堤防)をコラムで取り上げる教科書が少なくないが、この時代、全国の大規模な治水・灌漑・交通路整備に力を注いだ。

肥後国を治めた加藤清正もその一人で、清正公は、暴れ川と言われ何度も熊本城下を襲った白川や緑川に堰を築き、井手(用水路)を掘るなどして広大な穀倉地帯をつくらせた。大津街道など道づくりにも力を注ぎ、今の熊本の

戦後インフラ教育の充実を！

戦災からの復興(名古屋や広島市にある100以上の道路の整備など)／枕崎台風・カスリーン台風・アイオン台風・伊勢湾台風といった風水害との闘い／数次にわたる全国総合開発計画にもとづく国造り(6面参照)／道路整備とモータリゼーションの進展による経済成長など、教科書には記述されていない国土への働きかけの歴史が第二次世界大戦以降には沢山ある。自然災害大国であるにも関

らず、教科書には歴史的規模の大地震や風水害でさえほとんど採らざるに過ぎない。戦災からの復興(名古屋や広島市にある100以上の道路の整備など)／枕崎台風・カスリーン台風・アイオン台風・伊勢湾台風といった風水害との闘い／数次にわたる全国総合開発計画にもとづく国造り(6面参照)／道路整備とモータリゼーションの進展による経済成長など、教科書には記述されていない国土への働きかけの歴史が第二次世界大戦以降には沢山ある。自然災害大国であるにも関



鵜瀬堰(加藤清正公が手掛けた緑川の治水工事)

わらず、教科書には歴史的規模の大地震や風水害でさえほとんど採らざるに過ぎない。戦災からの復興(名古屋や広島市にある100以上の道路の整備など)／枕崎台風・カスリーン台風・アイオン台風・伊勢湾台風といった風水害との闘い／数次にわたる全国総合開発計画にもとづく国造り(6面参照)／道路整備とモータリゼーションの進展による経済成長など、教科書には記述されていない国土への働きかけの歴史が第二次世界大戦以降には沢山ある。自然災害大国であるにも関

点描

道の駅

国道愛好家 松波成行

新幹線の開業にともなって、JRの青春18きっぷが使いにくくなってきたというニュースに接し、やや郷愁ともいえる念を抱くのは、かつてその切符を購入し、あてもなく情に任せきりの旅を享受した身であったからなのでしょう。

近年、「ツーリズム」という言葉が耳慣れてきました。エコツーリズムやグリーンツーリズムにはじまり、土木建造物などを巡るインフラツーリズムといった新しいカテゴリーも生まれています。

「ツーリズム」を直接に日本語とするのは難しいのですが、旅の概念である「ツアー」の派

生で、語尾に「ズム」と付くように、ある目的や主義を明確にした旅といえるのでしょうか。エコやグリーンなど、核となるテーマに沿って日常では感得しにくい見学・体験をするツーリズムは、世界的にも人気です。時代のスタイルが「ツアー」から「ツーリズム」へと変化してきた、と言えましょう。

では、道の駅とツーリズム、それに連動する道は結びつくのでしょうか。道の駅が目的志向型にはなりにくいスタイルなのか、それとも革新的な「ツーリズム」を宿しているのかは、まだ解が見出されていない命題ともいえます。

カギを握るのは情報発信だけではありません。集積される情報のデータ統合(インフォマティクス)が重要になり、マーケティングとも結びつけることが肝要になってくると思われる。

説されることもない。歴史上の著名な人物や文化遺産等を主人公とする「政治史・人物史」「事件・出来事史」ナリスト 森田康夫

で、今後の歴史教科書への活用を期待したい。(国土学ア